Oral Session | Internal Medicine / Surgery

Fri. Nov 20, 2026 12:50 PM - 1:50 PM JST | Fri. Nov 20, 2026 3:50 AM - 4:50 AM UTC | Room 6 (1F 103)

Oral Session 13 Treatment Strategies for Unresectable and Recurrent Colorectal Cancer 1

座長：平田 賢郎（慶應義塾大学病院　腫瘍センター）

[O13-6] Encorafenib and cetuximab with or without binimetinib treatment for metastatic colorectal cancer with BRAF V600E mutation

*Kaoru Abe[1] (1. Department of Surgery,Niigata Cancer Center Hospital)

【背景】*BRAF*V600E変異陽性切除不能進行大腸癌において，従来の化学療法は効果が乏しく，予後が極めて不良である．近年BRAF阻害薬が使用可能になり治療成績の向上が期待されているが，使用経験が少ないのが実情である．【目的】当院で行われたBEACONレジメンの治療成績を検討すること．【対象と方法】2021年3月から2026年4月までに当科でBEACONレジメンを導入した*BRAF*V600E変異陽性切除不能進行再発大腸癌10例を対象とし，治療成績を後方視的に検討した．【結果】10例中，男性5例，女性5例，年齢中央値は63歳（範囲：48-75歳）であった．原発部位は右側5例，左側5例．同時性遠隔転移が5例（うち4例が腹膜播種），根治切除後再発が5例であり，再発症例はpStageⅢb，Ⅲcがそれぞれ1，4例であった．原発巣切除は8例に行われ，3例がR2切除であった．再発部位はリンパ節4例，肺1例，局所1例，卵巣１例，腹膜播種1例（重複含む）であった．BEACONレジメンの治療内容は，ENCO（Encorafenib）+CET（Cetuximab）が2例，ENCO+BINI（Binimetinib）+CETが8例であった．治療導入は2，3，4次治療がそれぞれ5，4，1例であった．BEACON治療期間の中央値は31週 （範囲：3-125週）であり，2例は加療中である．BEACONレジメンの最良治療効果はPR，SD，PDがそれぞれ6，1，3例であり，奏効率は60%であった．BEACONレジメン開始後の1年生存率は50%，生存期間中央値（MST）は12.3か月であった．これを根治切除後再発と同時性遠隔転移症例で比較すると，BEACONレジメン開始後の1年生存率とMSTは再発群で100%，52.1か月，遠隔転移群で20%，2.8か月であり，有意に再発群の予後が良好であった（P = 0.002）．
【考察】腹膜播種を伴うことが多かった同時性遠隔転移症例では，BEACONレジメン導入後も予後は極めて不良であった．一方で，根治切除後の再発症例では腹膜播種が相対的に少なく，本レジメンを継続できていることが予後延長に関連している可能性がある．
【結論】 BEACONレジメンは，根治切除後の再発症例に対しては良好な予後をもたらすが，腹膜播種を伴う同時性遠隔転移症例では依然として不良であり，病態に応じた早期導入や治療戦略の工夫が今後の課題である．

©一般社団法人 日本大腸肛門病学会